



小学校

英語活動ニュース

<http://oesesactivity.web.fc2.com>

<http://www.oeses-osakasayama.jp>

平成24年度の小学校外国語活動を振り返って

大阪狭山市教育委員会 学校教育グループ 主幹 尾島 肇先生



大阪狭山小学校英語活動支援の会のみなさんには、本年度も本市外国語活動の推進にご理解とご協力をいただき、ありがとうございました。

平成23年度から本格実施となった小学校外国語活動も、本年度で2年目を迎え、取組も少しずつ充実してきたように思います。本市では、すべての授業において子どもが自分の考えを主体的に表現する授業づくりを目指しておりますが、外国語活動の授業においても、子どもたちが自分の思いを伝えたり、相手の考えを尋ねたりする活動を数多く見ることができたのは、昨年までの取組から工夫改善が進んだ点であると感じています。これも支援の会のみなさんが、教職員やALTと連携を図り、授業研究に取り組まれた成果であると、うれしく思っております。

他にも、本年度は以下のような新しい取組が進められ、成果をあげております。

1. 「小学校における専科指導の充実に係る指導方法の工夫改善」事業として、第三中学校の中里教諭が、校区の西小学校と第七小学校で1年間外国語活動の指導にあたりました。(6年生には指導の中心として、5年生には指導支援者として関わりました。) 中学校の教科としての英語指導ではなく、小学校外国語活動のねらいに沿った展開を心がけ、学級担任やALT、支援の会の先生方との連携にも重点を置き、子どもたちに充実した授業を提供することができました。今後も外国語活動の推進と生徒理解の両面から、学校間のスムーズな接続に寄与できるものと期待しております。
2. 本年度、大阪府教育センターの小野指導主事を講師に招き、「小学校外国語活動授業づくりセミナー」を年4回実施しました。(7/6、8/24、10/12、12/7に実施し、英語活動支援の会のみなさんにも多数参加していただきました。) 研修では、小野先生から外国語活動の最新の話題や他市町村の取組の様子を教えていただく一方で、「子どもにとって『いい外国語活動』の授業とは」「小学校外国語活動の趣旨を踏まえた授業づくりとは」といったテーマについて、教職員と支援の会のみなさんとで研究討議する機会をたくさん与えていただきました。討議を通してお互いに意見を出し合うことで、共通理解を深めることができました。

平成25年度も支援の会のみなさんの協力をいただきながら、子どもたちにとって充実した授業づくりを進め、実りある1年にしていきたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

『第9回全国小学校英語活動実践研究会 京都大会』に参加して

平成25年2月8日、9日と京都において、『第9回全国小学校英語活動実践研究会』が、「英語に親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする子の育成～外国語活動の原点を再確認し、新教材“Hi, friends!”を生かした実践を～」をテーマに掲げて開催されました。「大阪狭山小学校英語活動支援の会」からも9人の会員が参加して、全国で行われている外国語活動はどのようなも

のであるかを学んできました。

開会式の来賓あいさつの中で、文部科学省 山中真一審議官は、「高校で英語の授業が All English に変わろうとしている。小学校でどのような実践がなされていて、子どもたちはどのようなことを学んで来ているかを知るために、”Hi, friends!” を手元に取り寄せて中学校でも変わらなくてはならない。何よりも変えなくてはならないのは、大学入試である」との言葉がありました。文部科学省自身が大学入試に、日本人の英語コミュニケーション力が低いという原因が潜んでいるという認識を明言されたことは、遅まきながら流れが変わりつつあることを認識させてくれた。

その後の講演は、直山木綿子教育課程・教科調査官（略）が「外国語活動の課題とこれから～小学校教育と外国語教育の視点からとらえる～」と題して、小学校における外国語活動についての研修の実態調査をもとに、研修の課題や今後取り組むべきことを示されましたが、詳しくは、4月に発行される大会報告書を見ていただければと思います。

「大阪狭山小学校英語活動支援の会」では、各小学校支援者が自由に読めるように、7冊購入いたしました。ご希望があれば、学校へも回覧をさせていただきたいと思っています。

「英語絵本の読み聞かせ会」盛会でした。

3月23日(土)午前9時30分から大阪狭山市立公民館にて、19人の幼児と小学校低学年児童の参加を得て『英語絵本の読み聞かせ会』を開催しました。当日、初めは緊張気味だった子どもたちも終わりに近づくに従って、声がよく出るようになって、笑顔をいっぱいにして動き回っていました。

アメリカ人の“マシュー ガードナーさん”の楽しい自己紹介で始まり、大阪狭山小学校英語活動支援の会のスタッフと一緒に絵本を読んだり、ゲームをしたり、手品を見たり、踊ったりと14個のプログラムによる、変化に富んだ楽しい時間を過ごすことができました。

保護者の皆さんからも、「早い時期から英語に少しでも触れる機会が持つことができたのでよかった」というご意見や、「もっと機会を増やしてほしい」というご要望をいただくほどでした。



英語活動の支援の折に、会員が心がけていること

1. 目的意識を持った活動を取り入れる。
2. 必然性のある内容にする。
3. 支援者も明るく、大きな声で発話する。
4. 学年の状況（発達状況）を踏まえて、アクティブティを考える。
5. 競争心をあおるだけに陥らないように工夫する。
6. 『クラス全体』⇒『グループ・班別』⇒『ペア』⇒『個人』と活動単位を変えて、慣れる工夫のもと『個人の発表』へという、難しい・恥ずかしいなどの意識の壁を低くする。
7. 『個人が発表する場面』を作りたいときには、『個人』⇒『ペア』⇒『グループ・班別』⇒『全員の前で』とステップを踏んでいく。
8. 「Please」「Let's」を付けて児童の活動を促し、「Thank you」と共に「Good job」などの褒め言葉を多くかける。
9. 支援者も担任も、またALTも自身の力をつけるために研修に努める。
10. 1単元を、input, output を積み重ね、単元の終わりには、コミュニケーションできる力を付ける。



日本の英語教育を考える「太田光春視学官と直山木綿子教科調査官の対談」から 新学習指導要領実施による教育現場の変化



直山 新学習指導要領の全面実施を受けて、今、教育現場は少しずつ変わってきています。実際に学校で授業を見ると、雰囲気はずいぶん変わりましたね。授業を受ける側の子どもたちもそうですし、もちろん、指導する側の先生たちも。文部科学省が行った小学校の外国語活動に関する調査によると、児童たちは「外国語活動」の授業を楽しんでおり、「楽しいこと」という質問項目に対し、9割の児童が「ゲーム」、

7割の児童が「外国のことを知ること」「英語と日本語の違いを知ること」と答えています。一方、これらに比べて「英語で友達や先生の話の聞いたり、自分の意見などを言ったりすること」と回答している児童の割合は、多いとは言えません。授業がゲームなどだけで終わってしまい、コミュニケーションにまで至っていない実践もまだ多いように思います。小学校の先生方には、児童が外国語を用いて通じ合う体験を通して、人と言葉で通じ合う楽しさや難しさを感じるような授業展開をしてください、とお願いしています。

太田 新学習指導要領で目指す「コミュニケーション能力」では、「聞き手や読み手に配慮して言葉を使うこと」を重視していますから、音声によるコミュニケーションでは、速度に注意しながら話したり相手の発言に対して相づちを打ちながら聞いたりするなどの態度を養いたいものですね。

直山 そうですね。聞き手が喜んで耳を傾けてくれるような話し方、また話し手が気持ちよく話せるような聞き方を意識することが大切だと思います。さらに、話す内容を、話し手も聞き手と一緒に深めることも大切です。例えば、こんな実践がありました。「将来の夢」を題材にした『Hi, friends! 2』の最終単元で、各児童が自分の将来の夢を紹介します。ある児童が“、I want to be a baseball player.”と自分の夢を紹介すると、ほかの児童から、“Why?”という質問が出ました。その児童が、“I want to get money.”と答えると、さらに「お金を何に使うのですか」と質問があり、その児童は「災害などで困っている人たちのために自分が稼いだお金を使いたい」と、日本語ではありましたが、理由を述べたのです。この学校では、この単元と並行して、総合的な学習の時間で児童が職業について学習し、職業を通して自分が社会とどのようにかかわるのかを、保育士さんや看護師さんの話を実際に聞いて学習していたのですが、そのことを、学級担任が単元とうまく関連づけたため、話す内容に深みが増したのだと思います。

太田 今の話にも通じますが、コミュニケーションの根底には、自分の気持ちや意見、情報を相手に伝えたいという欲求があるのですから、そこを大切にしたいものです。英語の授業ではそのような欲求を生かした活動を充実させてほしいと思います。それによって、聞き手に配慮して話すことができるようになり、「相手に聞いてもらえた」「理解された」と実感することで、自己肯定感が高まっていきます。コミュニケーション能力の育成を目指す授業では、生徒の自己肯定感や自己有用感を高めることができると思うのです。

「授業は英語で行うことを基本とする」の意味

直山 外国語活動では外国語の限られた語彙や表現を扱っているため、先の例のように、子どもたちは、時には日本語も織り交ぜて活動します。先生方をお願いしたいのは、そのようなときに、「今日は日本語も使いましたが、みんなが中学生になって英語を勉強したら、今日言いたかったことが、全部、英語で言えるようになるんですよ」と中学校での英語学習への期待感を持たせてほしいということです。小学校から中学校、中学校から高校へとその連携のあり方が課題ですが、お互いにど

んな授業を行っているのかを実際に見て、自身の授業でそのつながりを意識していただければと思います。最近、小学校の授業を中学校・高校の先生が参観する機会も増えてきました。また、例えば小学校では、「All English」で授業を進めなければならないと思う必要はありませんが、英語を使おうと意識する先生が増えてきています。もちろん、英語で授業を進める自信がある、やってみたいという先生にはどんどん実行してほしいと思います。ただし、授業は先生の英語力を披露する場ではなく、子どもたちが英語を使って活動する場だということは忘れないでほしいと思います。

太田 「All English」という表現が一人歩きしてしまい、授業では先生が英語を話し続けなければならないと誤解をしてしまう人もいますが、授業の主体は生徒なので、より多く英語を使うことが求められるのは生徒のほうなのです。授業で生徒が英語を使う場合には自分の意見や気持ちを伝えることが大切であり、そのため先生は、生徒が間違いを気にせずに発言できる雰囲気を作らなければなりません。もし生徒が間違えたり、言葉につまったりしたら、先生は間違いを指摘するのではなく、生徒の自尊心を損なわないよう配慮しながら適切な表現を示してほしいのです。言葉は、相手を論破して優位に立つためよりも、むしろ、人と人をつなぐために使いたいものです。あいまいさに耐えながら理解しようとする姿勢や、間違えるかもしれないけど勇気を持って使ってみようとする気持ちをまず小学校で育ていただき、それを中学校、高校へと引き継いでほしいと思います。

直山 おっしゃる通り、言葉とは、互いのことをわかり合うためにあると思います。そして、そのために、あえて不慣れな外国語、例えば英語を扱うのではないのでしょうか。私は「英語のマジック」というものがあると思っています。日本語では、机を並べている学級の友達に、わざわざ「食べ物は何かが好き？」とか「将来、何になりたい？」などと聞く場面はなかなかないですよ。でも、英語だと聞けてしまう。不慣れな英語を使ってなんとかやり取りした結果、相手のことがわかったり自分のことをわかってもらったりして、通じ合えたときの喜びはとても大きい。そのときに改めて「言葉って互いに理解し合うためにあるんだ、言葉って面白い」と感じられるのではないのでしょうか。

太田 そうした小学校の活動を受けて、中学校も変わってきましたね。

直山 そうですね。以前、中学校英語科の先生から、小学校で間違った英語に触れてくると、それを正すのに1か月かかるとか、アルファベットくらい書けるようにしてきてほしいという声がありました。しかし、最近、「外国語活動を経験した生徒は、多少わからない英語があっても我慢して聞こうとするし、単語をたくさん知っているので、入学後の早い段階から自己紹介ができる」という声が聞かれるようになりました。「太田光春視学官と直山木綿子教科調査官の対談」次号へ続く

平成24年度末を迎えて

今年度の総支援数は、1193時間でした。年度末の折には、先生方から支援の会への感謝の言葉をいただいたことや卒業式に参加させていただいたなどの話を支援者たちから聞き、会員一同、とてもうれしく思っているところです。これは、日ごろの先生方とのTTがスムーズに運べたことや、教育委員会主催の研修会に参加させていただく機会を得て、意見の交流を図る場を持ていただいたことなどの賜物と感謝いたしています。

私達「大阪狭山小学校英語活動支援の会」は、毎月定例会を開いて、次のレッスンプランを会員で共有する研修を行っています。この場に、先生方の参加をしていただける機会があれば、更なる発展が期待できると考えています。例会の案内は、ホームページで行っていますので、ご参加をお待ちしています。

